マシュー・アーノルドの『合衆国文明論』

渡　辺　栄太郎

Matthew Arnold's "Civilisation in the United States"

Eitaro Watanabe

1

マシュー・アーノルドは1888年４月に死亡する四年半前，83年10月からの約半年間と，86年の２回目のアメリカ訪問を経験して，これが彼の人生と社会活動に最後の大きな転機をもたらした。この体験を基に，最初の訪米以前に書いた"Emerson"を別として，彼は４編ほどの合衆国に関する長・中編の論説エッセイを世に出している。このいきさつに就いて，その一部を先ず述べることから始めることにしたい。

アーノルドは，自身が世を去る３ヶ月前の1888年１月20日と27日の間に，"Life in America"と題する講義録を書き上げていた。そうして彼が若い時代からの友人ロスチャイルド夫人（Lady de Rothschild）に告げた所によると，アーノルドはこの講義の内容をとてもややこしいものと考えていたらしい。また彼はこの内容を３度にわたって講演していた。第一回目は１月31日，ハル（Hull）の文学・哲学協会で，その３日後にブラッドフォードの哲学愛好会で，３回目は３月８日にブリストルで行われた。また２月17日にアメリカに居る娘ルーシーに手紙を書き，「私のアメリカ体験は，ハルとベッドフォードで講演の形で広く話をするのをとてもやり易くしてくれた。でもかなりうんざりする事で，約束を果たした後は，もう止める決心をした」，と語っている。地方新聞に出たこの講演の要約から知れることに，アーノルドは３月12日にノウルズ氏（James Knowles）宛に'*Nineteenth Century*'誌４月号の出版に向けてこの原稿を送り，基本的にその内容は，講演されたものと殆ど変わっていないものであった。支払いは通例のしきたり通り，£45だったと推定されている。但し遅い支払いだったので，彼の書き残された日記には記載されなかったという。

その後１ヶ月以内にこのエッセイはボストンで再版され，彼のこれまでのアメリカ関係の論説"General Grant"，"A Word about America"それに"A Word More about America"と共に４編

一つにまとめられ，これが“*Civilisation in the United States*”（Boston : Cupples and Hurd, 1888）の名を冠して上梓された。その後はケベックで仏語訳され，“*Études sur les États-Unis*”（Québec, 1902）として出版された。20世紀も後半に入っては，イギリスの英文学者ケネス・アロット（Kenneth Allott）により，1953年に註を付して世に出されている。

さて今回はマシュー・アーノルド最後の中編批評論“Civilisation in the United States”，原題“Life in America”を検討し，出版年代からすれば他の作品と全く逆になったが，本論を手始めにアメリカの文化・文明について，アーノルドの所見を基礎として，21世紀初頭現在のアメリカ文明の姿とその未来像まで含めて，可能な限り簡潔に，何編かにわたって時間をかけて論述を試みてみたいと思う。テキスト原文は，いつもの通りミシガン大学出版によるアーノルド散文全集［The Complete Prose Works of Matthew Arnold］，XI“*The Last Word*”である。今回も荒削りながら本文全体の翻訳を施し，これを基に論議を進めていくことにした。

※　※

このアーノルドの“Civilisation in the United States”は，最初の原題が“Life in America”と称した通り「文明」（civilization，現代綴り）とは言っても西洋文明とかイスラム文明とか，グローバルな視点から見た世界の文化現象の大きなまとまりを指しているのではなく，一読して感ずるのはアーノルドの生きて来たイギリス文明からする，アメリカ文明への批評というのが議論の主流となっている。言ってみれば，「野蛮に対して，人知が進んで開けた世の中，あるいは生産手段が発達して生活水準が上がり，人間尊重と機会均等などの原則が認められた近代社会」(1) などという意味に用いられた文明論であって，アメリカを主としてイギリスに対比した最小規模の文明論と理解した上で，内容の検討に入ろう。ただし後続する拙論では，単に文化面だけでなく歴史については勿論，現代的観点から政治哲学や国際政治学などへも多少踏み込んで，このアメリカ文明の世界文明との関わりに就いても，21世紀初頭の世界情勢に絡み，一そう文明論らしい研究論述として仕上げてみたい。それは建国の政治理念に基づいて今日の合衆国が存在するからである。

※　※

Two or three years ago I spoke in this Review on the subject of America; and after considering the institutions and the social condition of the people of the United States, I said that what, in the jargon of the present day, is called ‘the political and social problem,’ does seem to be solved there with remarkable success.(2)

「2，3年まえ私はこの雑誌でアメリカという主題について語った。そして合衆国人民の制度と社会的状態を考慮した後に，今日の訳の判らぬ難解なことばの中で，「政治的と社会的問題」と言われるものが，当地では著しい成功を以て解決されていると申し上げた。」

これが“Civilisation in the United States”本論の書き出しとなっている。続けてアーノルドは少しあけて，次のように述べている。

But I added that the solution of the political and social problem, as it is called, ought not so to absorb us as to make us forget the human problem; and that it remained to ask how the human problem is solved in the United States.(3)

「だが私は政治的社会的問題の解決は，言われるように，人間の問題を忘れさせるよう没頭すべきではないと付け加えた。また人間の問題が合衆国ではどのように解決されているかを，問い続けているとも言った。」

所でこの頃ルペル・グリフィン卿（Sir Lepel Griffin）という印度での役人が出版したアメリカ旅行記に，文明化したという国でアメリカ程住みたくない国はないと述べた記事を見た。これに惑わされず，人間の問題を解決するのに当地で何が成されているかを検証しなければならないとして，アーノルドは次のように続けている。

Certainly then, I said, one cannot rest satisfied, when one finds such a judgment passed on the United States as this, with admiring their institutions and their solid social conditions, their freedom and equality, their power, energy, and wealth.(4)

「そこで確かに私の言ったことは，人がこのように合衆国に通用しているそんな判断を見つける時に，満足してじっとしては居れないという事である。賞賛すべき彼らの制度やしっかりした社会状況，その自由と平等，その権力，エネルギー，それに富があるのに。」

恐らく，この第１段落から引用した以上３つの文節が，この論説エッセイの基調・主題をなすものであろう。それでこれを改めて敷延してみると，合衆国の政治的・社会的問題は，まずは作者の母国イギリスでよりも成功裡に解決されていると見られているが，実際の社会の制度とその運営状態，当地での自由度と平等性の実態，政治の実像，国民の活力と産業への反映，それに富の蓄積などに関してどのように営まれているか，これに就いて具体的に検証しようという意図を表わしているのである。その上で以上の事象を人間の問題として，総合的視点から捕えようとしているということでもあろう。アーノルドのこの論説が書かれてから21世紀に入って既に115年余もたつが，そこに記された具体的事例を先ず取り上げておかねばなるまい。

さて合衆国で作られた制度は，新しい環境や社会条件の下で，身の丈に合って，しかも成長して後も自然に適合するスーツのようなものだと見る。アメリカは階級の差別から独特に自由な共同社会であり，富者と貧者との結果的に分離を強調する社会と異って，政治的にも社会的にも自然の近代的条件に生きる健全さがある。人びとははっきりと物を見て，ストレートに考えるのが一般的である。これと比較して我れわれ（イギリス社会）では，人びとは均質性のない階級の組織と近代性に欠ける制度社会の中に生きて居り，不自然に複雑化して，精神の自由な全体的にはつらつとした動きを妨げられている。その結果，我れわれは明快さに不足を来たし，明析に物を

見て直接的に考える態度に欠ける。この点アメリカ人の方が，我れわれより多くの利点を有していると言える。従って国家としての成功や繁栄に拘らず，先述のグリフィン卿の言うアメリカ批判には，何か問題があるに違いないと考えるのである。では文明とは何だろうか？

It is the humanisation of man in society, the satisfaction for him, in society, of the true law of human nature.(5)

「それは社会に於ける人間の人間性化，社会の中で，人間性の真の法則についての人間にとっての満足である。」

アーノルドはこのように語って，プラトン（Plato）が人間の研究は‘いかに生きるか’(how to live？）という疑問への正しい解答を発見することだと語ったのを紹介している。その上で完全な人間性を作り上げるためには，幾つかの要素――行為の力，知性と知識の力，美の力，社会生活と作法の力（the power of conduct, the power of intellect and knowledge, the power of beauty, the power of social life and manners）というものがある。そうしてこれらすべての要素が充分に認識され，満足された時にのみ，完全に文明化が成立するとアーノルドは考えた。またこの文明を推し進める重要な目標の一つが安楽と生活の便宜（the comforts and conveniences of life）だと言っているように思われる。それで前に引用したグリフィン卿のようにアメリカの文明の欠点を非難する人たちは，専門職を持つ公的階級の人びと，我れらの文学やジャーナリズムの大部分を成す人たちも含めて特別に恵まれた階層の人たちであり，彼らは好みの何でも入手でき，社会を自分たちの有利に構成されているものと考えがちなのである。

これと対照的にアメリカでは，旧世界でよりも遥かに財産を起こし易く，貧しい仕事にもより良く支払われ，高度な仕事への給与の率は低い。収入の平等性が守られているといえる。また衣料品その他でもぜい沢品は高価で，食品果物などは豊富でしかも安い。（ベンタムの言う）最大多数の最大幸福という言葉もあるが，勿論，安楽と生活の便宜が充分に与えられても，それが幸福に結び付くとは思われない。しかしこの国アメリカには我れらの厳しい階級の区分，不平等は存在しない。むしろこの偉大な平等性がこの国に善をもたらしている，とアーノルドは断定している。

In the United States there is not our intense devision of classes, our inequality; there is great equality. Let me mention two points in the system of social life and manners over there in which this equality seems to me to have done good.(6)

この善を成しているという社会生活と作法或いは風俗習慣に表われている平等性について，アーノルドは具体的実例として次の２つを挙げた。

（１）単に形式的な習慣とはいえ，英国（イングランド）には，紳士の階級に属すると思われる人に手紙を出す時には‘Esquire’(殿，様，氏名の後に付ける敬称）を書き，そうでない人に対しては‘Mr.’を姓名の前に書いている作法がある。前者は中世時代の大いなる虚飾の店の習慣に由来するもので，相手の人に対してこのように差別することは失礼にもなり，誠にばかばか

しくも不愉快なこと，無意味なことではないかと，強い疑問を表明した。この‘Esquire’は廃止すべきものだとアーノルドは強く提言した。

（2）次に目立つ特徴はアメリカとイギリスの女性に見る作法・態度の大きな相違である。アメリカ女性の声や抑揚に反対して多くの事が指摘される向きがあるが，殆ど誰もがアメリカの女性には魅力があると認めている。彼女たちには自然の作法（a natural manner）による魅力，自意識でない作法，人工的であったり押さえたりしていない作法を身につけている。その作法は意識の自由と幸せを表わし，聞く者に快い喜びを与えてくれるものだ。これは疑いもなく文明の調べ（a note of civilisation）であるのと同時に，社会生活と作法・慣習の上に平等意識の証拠とその相互効果を示しているものである。これに対して中流階級のイギリス女性の間では，特に自分より上流の階級の人に接する場合，自分の態度や作法をあれこれと意識して抑制しようとする。つまり彼女らは婦人の階級の中に生きているということを意識せざるを得ない，という事である。このような訳で階級の枠付けを持たないアメリカ婦人は，自分達の意見についても率直で頓着せず，彼女ら自身その存在を楽しんでいるように見える。この自然さは平等性への信頼に発するもので，アーノルドはこれを文明の真実の調子だと認めたのである。アーノルドについて初めての伝記を著したパーク・ホーナン教授によると，「この論で，自分より上流の人目を常に意識しているイギリス中流の女性と比較して，アメリカの婦人が率直で自然，そして自由であるのを賞賛していた。彼はシカゴで会っていたWellesley, Smithなどのインテリ女性が忘れられなかったのである。」(7) (He could not forget Wellesley, Smith, and Vassar, or the intelligent women he met in Chicago, for that matter.)(8)

アーノルドはシカゴで会ったウェルズレー，スミス，ヴァッサー各夫人たちだけでなく，前後２回にわたった滞米経験中，彼の会合した著名人の夫人たちからも歓待を受け，その立居振る舞いと親切に感銘と感謝を感じていたのであった。

グローバルな視点で地球を見ると，世界的歴史学者アーノルド・トインビーやアメリカの国際戦略政治学者サミュエル・ハンチントンの指摘するように，現在世界は７つ又は８つの文明圏に分かれ，それぞれが宗教を中核として存在していると言われる。しかしこのアーノルドの文明論“Civilisation in the United States”は，本論の初めの方で触れたように，イギリス人アーノルドから見たアメリカ文明または文化の特質を述べた評論エッセイとなっている。21世紀初頭の現在，アメリカ合衆国は唯一の超大国として世界に君臨し，19世紀とは比較にならぬ存在となってしまった。「文明」と名付けられた以上，やがてはこのアメリカと世界との関わりやその未来性などに就いても考察を進めなければ，このアーノルドの論は単に文化的特徴の時代的考証に留まり，アメリカ文明を扱った研究として，現時点では充全な意味を成さないのではないか？従ってこの事では後続の論で補いを付けることにしたい。

さて，以上このアーノルドの「合衆国文明論」で前部３分の１強を占める内容は，一言でいっ

て社会に於ける平等性の恵沢を述べたものである。120年近くも以前の，少くともアメリカ社会での文化現象の一端を扱っているが，政治的・社会的問題という言葉が繰り返し使用されてはいるものの，抽象的に人間性的な解決の必要を強調しているのが目立つのみで，今日でいう社会科学的問題としては殆ど捕えられていない。Esquire という敬称使用の件，アメリカ女性とイギリス女性の相違の問題と社会階級の関りなど，国民性の比較を表わすものとして興味ある対照を成しているかもしれない。筆者の乏しい経験話ではあるが，海外研究と学会出席で何度も訪れている英国バッキンガム大学ディーン（学部長）教授の秘書夫人と，1988年グラスミヤーのワーズワース記念館で行われた「アーノルド百年展」出席の際，たまたま筆者と二人で行動を共にしたリバプール近郊在住のイギリス婦人との地道な優しさ，行きとどいた心使いと親切，それに，その前日リバプール大学で催行された「マシュー・アーノルド百年祭会議」[9]（Matthew Arnold Centennial Conference）のディナー・パーティに同席したノースカロライナからの５，６名のアメリカ女性たちの底抜けの自由な陽気さとの対照は，このアーノルドの論議から懐かしい連想として思い返される。

2

本節では，このアーノルドの「合衆国文明論」の残り11分の７程に当たる分量で，複雑に込み入った内容を整理して幾つかのグループに分け，それぞれに解明・検討を試みるという方法で話を進めて行きたい。

（１）‘interesting’ということ

アメリカ文明の性質と価値を考える場合，「文明」（civilisation）という言葉に対する疑問への解答は，「社会に於ける人間の人間化，真実で充分な人間性へ向けて成される人間の進歩」（the humanisation of man in society; his making progress there towards his true and full humanity）であるという。普通には産業，商業，それに富或いは自由や平等の度合い，数多い教会や学校・図書館の充実，新聞などによって高度に文明化したなどと呼ばれる。しかし人間性（human nature）には或完成へ向かう成長の本能があって，この人間性が文明に要求するものは，少なくともそれが満ち足りた文明と言うに価するものならば，‘interesting’という言葉で最も良く表明されると考える。例えば古いギリシァ文明などにその典型が見出せるとする。続いてカーライルが息子のトーマスにアメリカ移住を思いとどまらせる話や，当時イギリスで読まれ出したスイスの思想家アミエルの日誌への言及があって，文明というものはそれ自体が我れわれ人間に興味（the interesting）を持つようにし向けるものだという事を強調している。

Now, the great sources of the *interesting* are distinction and beauty: that which is elevated, and that which is beautiful.[10]

「さて，この興味の大きな源泉は卓越性と美とである。高尚なもの，そして美しいものである。」

まず「美」を取り挙げると，これがアメリカ文明にとって遥かな存在，明らかな弱点となっている。そこには美の感覚を養い，喜ばせるものは殆どない。それは，アメリカ人は元来大部分が，行為とビジネスが美の感覚よりもずっと発達したイギリスの階級から来たことに依る。アメリカの都市には美に向けて訓練され，自然の感覚を喜ばすものは何も持たない。莫大なお金を費して，或効果を果たすものだけである。例えばイギリスの St. Pancras での Midland Station のような建物で，Somerset House 或いは Whitehall のようなものは皆無に等しい。彼らには１人の天才リチャードソンが居るが，一般に建築で最高に成功しているのは，極端に言えば，木材の別荘小屋のファッションの例である。他の芸術で真に美しいと言えるものは，文学でも尚まだほんの僅かしか作られていない。その上アメリカの芸術家や教養と富のある人たちは，ヨーロッパに住んだり，きまって訪れたりしている。その上，北のメイン州からフロリダにかけて，Jacksonville というような ville を語尾に連ねた地名が多くて，不自然不適切で美を欠いたものが非常に多い。これは駅名を付ける時，測量技師が手元の古典辞書を適当に利用したからだと言われる。これなどは全く美の感性を欠いた結果で，人間性が卓越性を求めて成立する‘the interesting’には全く遠い存在でしかない。

（２）畏敬と尊敬の修練の必要

Das Schaudern ist der Menschheit bestes Theil.[11]

「戦慄は人間性が所有する最善のものである。」

ゲーテは或ところでこのように述べている。当今のアメリカ人に不足しているのは，畏敬と尊敬の修練である。曾ての厳しゅくで清冽な清教徒たちには畏敬のスリル（戦慄）が強く受け継がれていたが，この宗教は死のうとしている。アメリカ人は強く，抜け目なく，直立して有能な，そして効率的な人間を作ってきたが，高尚な特色を示した人物は少ない。アレクサンダー・ハミルトン[12]はまさに稀な特性を持った人だが，ワシントンはペリクレスとかシーザーの知的素養の代わりに品性（style）と人格に卓越性を持つ。リンカンは最近の米人伝記作者によると，彼こそが典型的アメリカ人だという。アーノルドは彼を評して，

Now Lincoln is shrewd, sagacious, humorous, honest, courageous, firm; he is a man with quarities deserving the most sincere esteem and praise, but he has not distinction.[13]

「今やリンカンは抜け目なく，賢明でユーモアがあり，正直で勇敢，且つ確固としている。彼は最も真しな尊敬と賞賛に価する性質を持った男であるが，彼には卓越性がない」と述べている。本当のところ何事にもアメリカでは卓越性（distinction）に乏しく，他の優れたものに畏敬を寄せ，尊重するという高尚化の感覚に逆らっている一般的風潮がある。中でもこれは新聞面に於て著しい。

（３）新聞の俗悪性

いかなる国もそれに値いする政府を持つものだとしばしば言われる。それと同じく，どの国もそれに価する新聞を持つという事である。新聞は要望に応える必要から読者とは密接な関係にあ

る。それで国全体に，相互に尊敬する訓練や高尚なものへの感情を抹殺するには新聞を取り挙げる以上のものはない。アメリカ人たちはニュースに一番の価値を置くと言うが，紙面を飾るのはドイツ皇帝の病気とかダブリンの貴族市長の逮捕の件はおろか，少々変わった市民の結婚話を微細にわたって詳説している記事である。これがアメリカでいうニュースなのかと疑問を感じた。真実と正気の不在，重大な興味に欠ける貧困，それに個性や高尚さに対する信頼は無いに等しい。例外的な新聞には *'New York Nation'* があるが，これらは極端に売れる部数が少ない。

先ずアーノルドがボストンに到着後すぐに新聞を受け，'Ticking'（時を刻む）という欄に彼自身の来訪を報じた記事で61歳の年齢を誤記したり，プリンス・オブ・ウエルズはメアリ・アンダースン嬢に大きな賛美を表明した事などを大だい的に報じていた。シカゴでは，'We have seen him arrive' とした大きなタイプの見出しの下にアーノルドの写真を添え，「彼は目障りな顔立ちに尊大な態度で，髪を分けて真中に垂らし，一つ眼鏡を付け，不似合いな服装をしている」(14) などと決して好意的ではない紹介をしていた。にも拘らず彼は当地では暖く受け入れられていた。最もひどいのは *'Chicago Tribune'* の編集者メディル氏に面会していたが，のちに当紙はアーノルドが寄稿したとする偽りの記事を載せ，市民を憤慨させた。一友人が彼に電報を寄せてアーノルドにこの事実を報告し，無実な事は確認されたが，それでも当新聞は彼の否認の受容を拒んだと書かれている。

アーノルドは語る。合衆国では人間の問題（human problem）は不完全に解決されてきた。大きな空虚がそこ全体に文明の中に存在している。思想と光明を愛する人，又その文明に 'interesting' を切望する人は自分の周囲から美の感性を，高尚さの感覚を育成しなければならないと気付いている。そしてその不足は重大であり，大衆によってこの不足が殆ど認識されていないのは極めて不幸なことであると。

（4）アメリカ人の不足，栄光化と自己賛美

アメリカ人は一体に粗野で（crude）徹底的に物質的で，多くの事を欲望のままに進めてきたように見える。そうして政治的問題も社会的問題も成功裡に解決してきたかに考えている面がある。その点で我れわれ（英国人）は事態を真直に見て注目する必要がある。しかし人間問題で全体的に高尚な感覚が満たされる必要があるように，アメリカ文明の欠陥を見つけ矯正するような動きは有るものだろうか？ ゲーテは畏敬のスリルは人間性の持つ最善のものだと言っているが，彼らは「地上に於ける最も偉大な国家」（the greatest nation upon earth）を創ろうとして，彼らの歴史家に言わせれば，

American democracy proceeds in its accent 'as uniformly and majestically as the laws of being, and is as certain as the decrees of eternity.'(15)

「アメリカ民主主義は，「存在の法則のように一様に堂々と」強調されて進行し，「また永遠の神の布告の如く確かなものである。」」

── ということである。しかしながら彼らアメリカ人は，新聞がスキャンダルだという事実を受

け入れるかどうかは別としても，新聞が卓越の目覚ましいモデルだと確信しているのである。また彼らは平均的な人間の洞察で英語の綴りを改革している（ウェブスター辞典の動きを指しているのであろう）。[16] その上アメリカ文学を，それが恰もアメリカ独立の力であったかのように扱っているし，Roeという西部出身の作家がディッケンズやスコットに匹敵するものとして読まれているという。アーノルドが友人としたボストンの批評家Colonel Higginsonは，英国人は最善の資質を持った人種で，その素質を受けたアメリカ人は，より明るく立派な，より高度な形の文化を創るのは当然だと考えていた。新しい土地・気候と平均的人間の圧力から正しいアクセント，未来の標準的話し振りを彼らは相互に確認し合っている。しかしその風潮で最悪な事は，この種背丈高な話し合いと自己栄光化（self-glorificasion）とは当地で正気な批判から，いかなる非難にも会っていないことである，とアーノルドは心配している。ここで彼は懇切だった友人，ピッツバーグで偉大な財を成したスコットランド人カーネギー氏（Andrew Carnegie）が“*Triumphant Democracy*”というアメリカの発展を描いた素晴らしい本を出版した事に触れ，それと，そのやや物質主義化した傾向を補って遅れて上梓された牧師の書“*Our Country*”とを取り挙げて，その中でアメリカ人の不足とその危険，またこれに対する治療法を見出したとする。曰く，

—— ‘ours is the elect nation for the age to come. We are the chosen people.’[17]

「—— 「我れわれの国は来たるべき時代への選ばれた国家だ。我れわれは選ばれた人民なのである。」」

我れらアメリカ人は背高く重く長生きをし，豊かで精力的，中でも他の人より優れた神経の仕組みを持つ。この天才の感受性が高度な文明を創るであろうと予想している。それでいながら政治的敵手とその行為に対しては，アメリカでは激しい言葉が豊富に聞かれる。このような状況を知って，アーノルドはアメリカの危険の一つは自己賛美（self-praise）と自己欺瞞（self-deception）であると指摘した。イギリスでは上流階級は物質化し，中流は俗悪化し，下層庶民は獣的である[18]が，アメリカでは大衆が物事を有る通りに見ないで，有りたいように見，知らされた通りに信じ込む様子が伺える。実は他にも教養のある賢明な喜ばしい個人が沢山居るのであるから，これらの人たちこそがアメリカの希望である。

In what concerns the solving of the political and social problem they see clear and think straight; in what concerns the higher civilisation they live in a fool's paradise.[19]

「政治的社会的問題の解決に関することでは彼らは明瞭に物を見てストレートに考える。高度な文明に関することでは彼らは愚者の楽園に住んでいるのだ。」

これを或有名なフランスの批評家が言うには，

—— la dure inintelligence de Américains du Nord ——[20]

「—— 合衆国人の頑固な理解しにくさ ——」

ということになる。アメリカ人は人間の問題を幸せに解決しなければ，その文明は充全で他から注目される興味ある（interesting）ものとなることはできない。

（5）要約と結論

アメリカ文明で現実に不足しているものは興味（the interesting）であり，その要素は高尚さと美（elevation and beauty）である。そこで緊急に必要とされるのは光明ある人たちによる冷静で正気な批判の着実な開示である。特に新聞界に於てその必要性を認める。しかしながら合衆国の未来は計り知れない重大さを持つ。今日既に我れらの中にアメリカ人の影響が多く感じられるし，彼らから学ぶべき事も沢山にある。我れわれのデモクラシーが彼らのものに及ばないと自覚する事態も生ずるであろう。通俗性と低劣さは平均的人間の支配から生まれるもので人間性の敵であるから，これを善導する卓越性と美（distinction and beauty）を広め身に付けさせるよう努めて，真実を見つめ，自慢と自己欺瞞に陥ることのないように気を付けるべきである。アーノルドは地上に高尚さと美を備えた理想的社会に到達すべきことを強調している。彼は聖書の一節の again の代わりに from above を入れて，次の句を以て結びとした。

'Except a man be born *from above*, he cannot have part in the society of the future.'[21]

『天上から生まれた人でなければ，未来の社会に参加することは出来ない。』

※　※

これまでにアーノルド最終の中編批評論"Civilisation in the United States"について，その全貌の解明と分析を試み，若干の解釈を加えてそれを5つの項目に分けて整理してみた。これでこの文明エッセイの内容は明らかになったと考える。そこで次には本節の（1）から（5）までについての付帯事項や解釈と敷えん，それにこのエッセイにまつわる事情とか評価その他，知られ得る所を簡単に記述しておきたい。

まず（1）での「文明」についてのアーノルドの見解を見ると，中心的な課題は人間性の進歩とその社会の問題に在ると主張しているように思われる。これは第1節に掲げた「人知が進んで開けた世の中，生産手段が発達し，人間尊重・機会均等の認められた近代社会」というのと本質的に変わるものではない。文明というものを広く捕えれば色いろな形と段階があると思われるが，一般に野蛮という言葉と対置すれば最も理解し易い。但しこのアーノルドの論で扱われている文明というのは，事実上，彼の言う政治的社会的問題を社会科学的に検討したものではない文化現象であって，それもイギリスのものから見たアメリカの社会文化現象の印象であるという言い方が正鵠を得ているであろう。またその意味では，原題の"Life in America"の方が内容にぴったり合致していると言えるものである。

次に文明に要求されるものは'interesting'だと指摘されているが，率直なところあいまいで弱体な概念でしかない感じが否めない。そしてその「興味」の源泉は「卓越性と美」（distinction and beauty）だと言われているが，当の時代性とアーノルドの思考様式の特徴を思わせる一方で，現代の我れわれには説得力ある理念には感じられない。むしろ多少内容はづれても，文明を推進する要素としての必要の基となる「欲望」（desire）と，人間の「好奇心」（curiosity）などを挙げた方が我れわれには納得しやすい。その他の具体的事象は，当時発展中のアメリカを描いたもの

として面白い。

次に（2）で取り上げたアメリカ人に畏敬と尊敬の念が必要とする説は，発展するアメリカ人に対して，先輩国イギリスの立場からの忠告の気持を述べたものと解釈するのが自然であろう。アメリカの文化に就いて高尚な特性を養って独自性を持てと言っているように見える。アメリカ民主主義を代表するリンカンに対して，当時のアーノルドが抱いていた感懐を述べた一節は特に興味深く読むことが出来る。

新聞の俗悪さ（3）に見られるアーノルドの見解には，当時の新聞メディアの重大さに対する当然な彼自身の認識を示している。彼自身に関する誤報はともかく，彼が書いたとする悪意の記事は許されるものではあるまい。アーノルドはさすがに，この件では大変憤慨していたらしい。テキストとして用いた"*M. A., The Last Word*"の'Critical and Explanatory Notes' p.486に，'The indignation Arnold felt toward the American newspapers had grown on him in the recent years.'と出されている。アーノルドは1885年10月22日に，'*The New York Times*'紙上で直接シカゴ・トリビューンではなく，'*The New York Tribune*'の編集者宛で抗議の文を公表した事が記録してある。当時アメリカの新聞メディアは未成熟でこんなこともあったのかと思わされるが，昨'03年，世界的に定評のあるニューヨーク・タイムズに，過去に所謂デッチ上げ記事を書いたとして処分された記者のことが報道されていた記憶がある。こんな事は例外としても，アーノルドがアメリカで人間の問題は不充分に解決されてきたなどと言うのは，彼自身の経験に照らし合わせて，こんな所に原因があったのであろう。現在（21世紀初頭）で，シカゴ・トリビューンは，シカゴ市の小ニュースソースを扱う地方紙シカゴ・サンタイムズと共に当市の２大新聞となり，国際事件，高度な文化・芸術に紙面を充実させて，中西部最大の読者層をかかえるメディアとなっている[22]という。

次はアメリカ人の栄光化と自己賛美（4），及び結論など（5）に就いて。19世紀のアメリカは20世紀に続く大きな発展の途上にあった。既に南北戦争を経過し，1860年代末までには西部フロンティアの開発もほぼ達成に近付いたが，特にヨーロッパからの外国移民も増大していた時代である。アメリカの歴史学者フレデリック・ターナー（Frederick J. Turner）は次のように述べている。「東部において，社会的諸条件が固定化しようとする傾向があるとき，――（中略）――いつでもフロンティアの自由な諸条件へと逃避する門があった。これらの自由な土地は個人主義，経済的平等，社会的に上昇する自由，民主主義を促進した。」[23]

マシュー・アーノルドが２回もアメリカを訪問した時期は，まだまだこの余波が静まらない時代であった。アメリカ人が選民思想を抱くなどというのは論外としても，自分たちの発展に対する栄光化と賛美に走る素地は，それなりに存在した事であろう。アーノルドはこれに就いて謙虚になるよう警告を発していたとも言える。

アーノルドはアメリカ社会に就いて，政治・社会問題はほぼ巧く解決されているが人間の問題は誠に不充分にしか行われていないと言っている。特に彼自身の関わった新聞での事件では，当

時新聞が唯一の社会的メディアだっただけに，彼の思想・感懐への影響も甚だ大きかったであろう。アメリカという国家も国民も，まだ成熟の域には達していなかった事も確かだと言えよう。

も一つ最後に気付くのは，作者アーノルドのアメリカ民主主義への期待である。前述の新聞での事件に拘らず，彼は光ある人びと，理性と知性ある人たちの奮起を期待していたのである。ただしこれが最終的に「アメリカ文明論」と題名されながら，事実上その重要な要因の一つとなる政治・社会制度からの分析には殆ど触れられていない。イギリスと対比されたアメリカ文明論ならば，広い見地からは当然，いやむしろ統治形態や制度の基本的相違からする文化・社会現象への影響を，より実証的に検討して欲しかった思いが残る。

1984年７月28日，筆者がリーズ大学を訪れて面会し，著書にサインをいただいたパーク・ホーナン教授のその著作 "*Matthew Arnold, a Life*" には，この間の事情を広範に，また誠に適切に表現した文章がある。

The contrast between British and American societies lies at the heart of his thought after 1884; it can be felt in his Irish essays, which reflect his belief that the United Kingdom cannot match the sane, efficient, democratic federal system of the United States. Like Stephen Spender later, Arnold believed Americans were in many ways "adolecent," but also that in some ways they could rise above Europe: their state-system, Constitution, energy, and respect for freedom seemed unique.[24]

1883～４年の第一回アメリカ訪問以来，アーノルドの思いはアメリカを離れることはなかったであろう。正気さ，効率，民主的連邦組織で，イギリスはアメリカの政治体制に及ばないとアーノルドは考えていたと述べられている。アメリカ人はまだ幼っぽいが，国家組織，憲法，力と自由の尊重でユニークであり，やがてはヨーロッパを越える国となると心底では考えていたのであろう。これがアーノルド最後の中編批評論となったのである。

3

アメリカの国際戦略政治学者サミュエル・ハンチントン（Samuel P. Huntington）が1996年に発刊した "*The Clash of Civilizations*"「文明の衝突」論に依れば，現在，世界は７つ又は８つの文明に分けられるという。（サハラ以南のアフリカを１つの独立した文明圏とみなせば８つ）そうしてその各文明の中核を成すものは宗教であるとされる。所で本論第１，第２節でこれまでに検討してきたアーノルドの批評論は，英国人の眼で見たアメリカの社会的文化現象の観察ではあるが，政治的社会問題の分析には殆ど触れられていない。アーノルドの「アメリカ文明論」が世に出て既に１世紀以上経過し，当のアメリカが唯一の超大国となった21世紀初頭の現在では，英米の文化的現象の相違を見直すだけでは不充分であり，今日のアメリカ合衆国の世界的地位も考慮に入れながら，その政治組織的側面の検討を抜きにしては，文明という言葉に価するものの研究には程遠いのではないかと思う。政治は当該社会の基盤を決定する最も重要なファクターであ

り，英・米両国を比較した場合，根本的に大きく相違するのは，風土・気候の自然条件を別にすれば，両者間の統治形態の問題だからである。この事に就いてはアーノルドの他のアメリカ論の検討と重ねて，後続の論で出来るだけ重点的且つ簡潔に，筆者なりにアメリカ文明への解釈として展開してみようと考える。勿論，一言でアメリカ文明といってもその内容はとても安易に言い尽くせるものではない。従って後続の論も含めて，この文化・文明全体を最大公約数的に，しかもその中核的統治形態の特質とその政治様態を中心に的をしぼって扱ってみたいと考える。

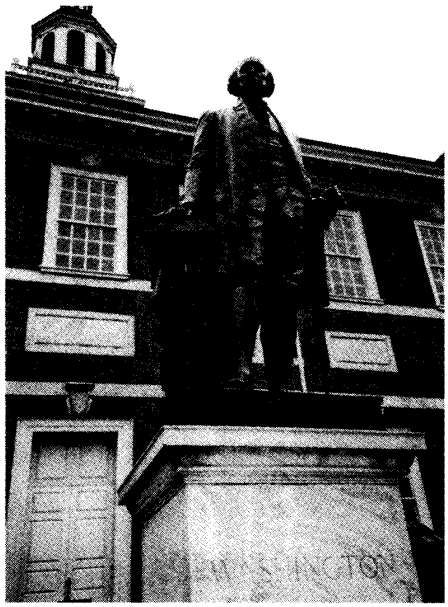
※　※

今日アメリカを支配するようになった元の文化は，17世紀の初頭に大挙して移民してきたピューリタン（清教徒）と呼ばれる人たちが築いたものであった。彼らは無論，マシュー・アーノルドの故国イギリスに代表される，アングロ・サクソン文化に属する人びとである。イギリスではヘンリー８世時代にローマ・カトリック教会と分離し，1534年国王を首長に独自の教会を作った。これがイギリス国教会である。しかしこのイギリス国教会が分離しても，なおローマ・カトリックの礼拝形式を色濃く残していたのに反発した教徒たちが，独自の宗教集団を設立する動きとなった。彼らは1609年に一旦オランダに渡航したが英蘭プロテスタントの同盟関係から受け入れられず，翌20年改めてイギリスのプリマス港からメイフラワー号でアメリカへ出発した。これが大西洋の荒波に翻弄され，寒風吹きすさぶ同年11月の９日コッド岬沖に漂着した。彼らは後‘Pilgrim Fathers’と呼ばれるようになったが信仰の自由を求めてきたのは41人で，他の61人は冒険を求めた人と食うにも事欠く人たちだったという。上陸前の11月11日，信仰のために来た41人は‘May Flower Compact’という契約を交わし，１つの政治団体となる約束をした。これが植民地自治，アメリカ民主主義の礎として広く評価されるものとなった。その後10年してボストンに国教会の改革に見切りをつけた新しいピューリタンが上陸し，以後も18世紀半ばにかけてピューリタンだけでなく，カルヴィン派，クェーカー，英国教会，カトリックなど色いろな宗派のキリスト教徒が渡来してきて，各地に植民地を建設し，その数は13に達したのである。植民地の住民には先住民も居たが，中心を成したのはイギリス或いはヨーロッパからの移民であった。フロンティアを開拓する彼らは自然の脅威に接して日々生死を真近にし，宗教を求める気持は強かった。13州全土にわたって平等の精神が生まれると共に，表面はイギリス国民でも心底ではアメリカ市民だという意識が育っていたのである。1765年以降英本国からの印紙税法に苦しめられ，73年に有名な「ボストン茶会事件」が起きた。そうして遂に75年４月，ボストン郊外で植民地人と英軍との間に武力衝突が生じたのである。この戦争は７年も続くことになるが，始まって間もない76年７月４日に「独立宣言」を発布した。この早目の行動は，植民地全体が独立に前向きでなかったための先手だったと言われる。

「独立宣言」に際して使われたというリバティー・ベル，在フィラデルフィア（1999年夏）

尚ついでながら英本国では，1640年議会軍の指導者であったクロムウェルによって所謂ピューリタン革命が生起し，それが挫折して王制に復古するまで，共和政の統治が行われた。この革命政権では外国語秘書官であったジョン・ミルトンが活躍し，その追放後英文学史上の一大傑作，長篇の叙事詩“*Paradise Lost*”（失楽園）が残されたのはよく知られた事実である。今日では世論調査上，約３分の２程が王制支持派だと言われている。

さてアメリカでは，「独立宣言」が発せられても植民地ヴァージニアが革命を起こして邦（州，state）となり，他の植民地もこれにならった。それで植民地間の連帯を維持して行く必要から「連合規約」が作られた。この規約は合衆国の第一憲法ともいうべきもので13条から成り，その第一条で「この連合の名称をアメリカ合衆国と定める」[25] とうたったのである。しかしこの規約による中央機関である「連合会議」には権力が付与されず，各邦の自治権が圧倒的に強かった。そういうわけで1787年５月，各州代表55人がフィラデルフィアに集まり，ジョージ・ワシントンを中心に憲法制定会議が開かれた。憲法草案が完成したのは４か月後の９月17日であったが，各州に直ちに批准されたわけではなかった。州権が弱められるのを恐れる人たちや，高い税金を心配する農民が批判的だったのである。そこで欠如していた「権利章典」が約束され，紆余曲折を経て1788年６月に漸く合衆国憲法は批准され，発効したのであった。91年11月には10条から成る「権利章典」も発行にこぎつけた。このような難儀を重ねて，アメリカ合衆国は国家として出発したのである。初代大統領は，植民地軍の総司令官を勤めたジョージ・ワシントンが就任し，次点のジョン・アダムズが副大統領として会場はニューヨークで挙行された。臨時首府はフィラデルフィアであったが，93年に入って新首府の礎石が置かれ，1800年４月にワシントン特別区（Washington District of Columbia）と称して初代大統領とアメリカ発見者コロンブスの名を残し



制憲議会場の前に立つジョージ・ワシントン銅像
(フィラデルフィアにて，1999年夏)

たのである。これからアメリカ合衆国発展の歴史が始まることになった。

以上見てきたように国家としてのアメリカ史は1776年の独立宣言に始まる。1868年の日本の明治維新に先立つこと約1世紀，アメリカは近代国家として出発したのであった。その後独立を達成し，18世紀に事実上世界で最初の民主主義国家として船出したのである。その後，南北戦争を経験し，奴隷解放を果たして国内矛盾を解消し，国家の統合と世界一の工業国の基盤を構築した19世紀，経済恐慌を招きながらも2度の大戦を経て資本主義世界の雄となり，世界の警察官として振るまった世界大国としての20世紀と，いわば三段跳びの躍進を遂げて21世紀を迎えている。よく見るとアメリカのコインには3つの標語が刻まれている。曰く IN GOD WE TRUST（我れらは神を信ずる），E PLURIBUS UNUM（多様から一つを），それと LIBERTY（自由）である。移民によって建設され，小国として誕生した当初のアメリカにとって最大の課題は，すべての住民に共通する理念によって一つの国民として統合を実現することだったと言えよう。

「神のもとに多様性を認めて国家の統合を図り，同時に個人の自由を保障するという下手をすれば矛盾しかねない目標を同時に実現しようとしたのが，アメリカの歴史だったのである。裏側から見れば，自由と統合の衝突，あるいは自由と平等との衝突が独特な活力の源泉となって，活気あふれるアメリカの政治，経済，社会の動きを生み出してきたともいえる。」[26]

日本の批評家または研究者と称する者の著作に，アメリカを「人工国家」と呼ぶ記事を時どき目にすることがある。しかしアメリカはアメリカとしての人間の歴史と自然の成り行きを背負ってきたのであり，これも人間性の偽わらない本性の流れから生じた必然の結果であることは疑いようもない。決してアメリカだけが自然性を欠いた人工の特殊な国家ではないと，筆者は考える。フロンティアの意義を強調した諸論文でアメリカ史学史に大きな業績を残したというフレデリッ

ク・ジャクソン・ターナー（Frederick J. Turner）は，フロンティアが機会の平等をもたらし，自由と平等の精神を育成し，自由で平等な社会の形成に貢献した，つまりアメリカの民主主義を生み育てた，と論じているという。日本のあるアメリカ史書には次のような記事が続いている。

「ターナーの言葉には誇張があるけれども，フロンティアの存在，西部への発展をアメリカ的民主主義の形成における重要な要素とみなす彼の見解を根本的に否定することはできない。流動的なフロンティア社会では，実力あるものが成功する可能性が多く，成功者は家柄などにかかわりなく社会的地位を築くことができた。東部の比較的古い地域のエリートは彼らの威信の少なくとも一部を家柄など世襲的継承物に負うていたが，西部の新しい地域のエリートは自己の努力による成功だけが威信の基礎であった。それゆえに彼らは世襲的継承物の価値を排して自力による成功の価値を強調したのである。自力による成功者として，庶民性を強調しつつ，大統領に当選した最初の人物アンドルー・ジャクソンが，西部の新しい州の出身者であったことは偶然ではない。

フロンティアの前進は，アメリカ資本主義の発展と相互に関連しつつ，野心ある多くの者に成功の機会を与え，それによって，アメリカは「機会の国」であり「階級のない社会」であるという観念を国民的なものとして定着させることに貢献したのである。」[27]

19世紀80年代も末近く，マシュー・アーノルドはアメリカの未来への可能性を充分に予見していた。しかし今日これ程の繁栄と発展をまのあたり眼にしたとしたならば，きっと予想以上のものとして驚くことであろう。

本論に引き続いて幾つかのマシュー・アーノルドに依るアメリカ関係論を手掛けて行くことになるが，前述したように時の経過はその内容を歴史的価値の中に入り込ませようとしている。従ってその研究は現代的視点からそれらを把握して解釈し，併せて21世紀にも君臨しようとしているアメリカ文明に就いて，アーノルドの一研究者として，今後にささやかな見解とその未来への予見を取りまとめておきたい。またそれに関連して，もし可能ならば，我れわれの生きてきたこの地球世界の来るべき運命についても，思いを馳せてみたいものである。

［註］

（1）拙著『海外探訪と世界情勢理解のために』（A５版341ページ）；渡辺栄太郎，三省堂・創英社。P.324, *l.* 17, 参照。

（2）"*Matthew Arnold, The Last Word.*" Edited by R. H. Super, Ann Arbor the University of Michigan Press. p.350, *l.*1.

（3）Ibid., p.350, *l.*8.

（4）Ibid., p.350, *l.*17.

（5）Ibid., p.352, *l.*18.

（6）Ibid., p.355, *l.*15.

（7）『マシュー・アーノルドと諸人の救い』，渡辺栄太郎，文化書房博文社。P.109, *l.*21.

(8) "*Matthew Arnold, a Life*", Park Honan. McGraw-Hill Book Company. p.417, *l*.31.
(9) *Cf*.「マシュー・アーノルド没後の動勢（2）」第3節，大東文化大学紀要第28号，＜人文科学＞p.236.
(10) "*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.358, *l*.24.
(11) Ibid., p.360, *l*.16.
(12) Alexander Hamilton (1757-1804)，アメリカの政治家。独立戦争に参加し，ワシントン大統領の下で初代財務長官を勤める。強力な中央集権論者で，長年の政敵バーと決闘して死亡。
(13) "*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.360, *l*.29.
(14) 'He has harsh features, supercilius manners, parts in his hair down the middle, wears a single eyeglass and ill-fitting clothes.'—"*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.362, *l*.20.
(15) "*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.364, *l*.19.
(16) Noah Webster (1758-1843)，アメリカ辞典編集者。1828年約7万項目に及ぶ英語辞典"An American Dictionary of the English Language"を出版，今日のアメリカ英語の基礎を作る辞書となった。
(17) "*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.366, *l*.6.
(18) *Cf*.『マシュー・アーノルド研究（第一巻)』，渡辺栄太郎，文化書房博文社。p.114，p.116，p.393.
(19) "*Matthew Arnold, The Last Word*", R. H. Super. p.367, *l*.27.
(20) Ibid., p.367, *l*.32.
(21) Ibid., p.369, *l*.14.
(22) *Cf*. "*Wonderful USA*", Timothy Kiggell, Macmillan Language House (Japan). p.64, *l*.4.
(23)『アメリカ史概論』，有賀貞，東京大学出版会。p.194, *l*.7.
(24) "*Matthew Arnold, a Life*", by Park Honan, McGraw-Hill Book Company. p.418, *l*.6.
(25) *Cf*.『早わかりアメリカ』，池田智，松本利秋，日本実業出版社。
(26)『現代アメリカ入門』，堀本武功編，明石書店。P.17, *l*.11.
(27)『アメリカ史概論』，有賀貞，東京大学出版会。P.9, *l*.9.

(2004年9月24日受理)